

## 学校経営のポイント

### 心を打つ表現, 考えさせる表現の工夫を

若井 彌一

卒業式の時期である。毎年のことながら、巣立ちゆく喜びとともに、信頼関係を築いてきた人々とのひとまずの別れを意識して美しい涙を流す様子に、ついホロリとさせられる。全国の多くの学校で感動的な卒業式が行われ、また行われようとしていることであろう。

#### よく歌われる歌詞は洗練されている

ところで、卒業式によく歌われる曲はどんなものが多いか。公式的な調査が行われているわけではなさそうであるが、最近「旅立ちの日に」(平成4年、作詞・小嶋登、作曲・坂本浩美、編曲・松井孝夫)の人気の高いようである。

この曲の2番の歌詞は次のようなものであり、学校における児童・生徒の人間関係を想起させ、新たな旅立ちをしていく決意を促す内容である。

懐かしい友の声 ふとよみがえる  
意味もないいさかいに 泣いたあの時  
心通ったうれしさに 抱き合った日よ  
みんな過ぎたけれど 思い出強く抱いて  
勇気を翼にこめて 希望の風に乗  
この広い大空に 夢を託して  
(繰返し部分 省略)

この曲に限らない。ドラマ「金八先生」の主題歌「贈る言葉」(昭和54年、海援隊によって大ヒット)の歌詞「暮れなずむ町の 光と影の中 去りゆくあなたへ 贈る言葉(以下、省略)」は、あまりにも有名である。曲折はあっても卒業式を迎えた児童・生徒たちがこの曲を歌うとき、歌詞の一言一句を噛みしめながら歌うことであろう。

これら2曲に限らず、「巣立ちの歌」(昭和40年、作詞・村野四郎、作曲・岩河三郎)もよく歌われて

いるようである。また、解説するまでもなく、「蛍の光」(スコットランド民謡、作詞・稲垣千穎、明治14年・尋常小学校唱歌)は、最も伝統的な卒業式の歌としての地位を保っている。

これらの曲に共通しているのは、いずれもそれぞれの歌詞には人の心を打つ、洗練された表現が用いられていることである。

#### “言葉のプレゼント”の心がけと実践

卒業式に歌われる曲の評論のようになってしまったが、そのことを意図しているのではない。卒業式の日だけ、児童・生徒が感動すればよいのではない。願わくば、毎日が学びの充実感と達成感で満たされている学校生活であってほしい。

その実現(といっても、さまざまなレベルがあるが)の鍵を握っているのは、日常の教育活動のなかで、学校教職員がどれだけ児童・生徒に学びの楽しさや充実感、仲間とともに生きていることのすばらしさ等に気づかせ、考えさせる言語表現を用いることができるかである。

そうはいつても、学校での指導活動すべてにおいて適切な表現に気を配っていたのでは、教職員が疲労困憊してしまう。それならば、各教職員がせめて一言、長短は問わないが、「こういうすばらしい表現があるんだね」と、児童・生徒に「言葉のプレゼント」を心がけ、実践してみてもはどうだろうか。毎日一言であっても、1年、2年、3年...と積み重ねればどうであろう。

学習指導要領でも述べている「言語環境を整える」ことの、最も無理のない、どの教職員でも可能な取り組みの呼びかけである。

(わかい・やいち=上越教育大学教授・附属小学校長兼任)

●好評発売● 3月18日刊 坂田 仰(日本女子大学)【解説】A5判130頁・定価1260円 教育開発研究所

## 『新教育基本法 〈全文と解説〉』

上越教育大学附属小学校【著】B5判215頁・定価2520円

★好評発売中! 『関係力~「子どもが生きる学力」への挑戦~』